

想の趣向がある。「諺解」は、あしびきの山ぢの苔の露のうへにねざめ夜ぶかき月をみる哉

を参考歌として掲出してゐる。
(秀能・新古今・秋上・三九八)

旅泊夢

(28) 古里は夢にも猶やうとはまの浪のまくらに月をのみみて(四三七)

(校異) なし

「諺解」は「有度浜、駿河也」とする。

うど濱の疎くのみやはよをばへん浪のよるくあひみてしがな

の例歌がある。
(読人不知・新古今・恋一・一〇五一)

「夢にも猶やうとはま」では「うと」が掛詞になつてゐる。「浪のまくら」は頓阿自身、あしの葉に夜の雨きくみなと江の浪のまくらをいかであかさ

(草庵集・一三〇八)

にも使用してゐる。

一首は、舟中で浪の音を聞きながら月ばかりみて眠れないので、いよいよ古里は現実だけでなく、夢にもみえぬ遠いものとなつてしまつたの意。

舟中の旅泊は波の音が荒くて、なかなか寝つかれない。眠れないままに古里のゆかしさに月ばかり眺めて、まんじりともしないので故郷への恋慕の情をつのらせているとうたつてゐる。

述懐

(29) 山ふかく猶も入べきあらしはとをしれ老のさかぞこえぬる(四六一)

(校異) しれーらで(承応本・松平本)、からで(架本)

底本の「とをしれ」では意味不通なので、諸本の「とをらで」を妥当な本文として採用する。

この世から遁世して山居しているが、もつと俗世を離れた山奥深く入るべきだと、かねがね思っていたが、それを果さないで老の坂を越えてしまったことよの意。

以前より予定していたことが、なかなか実行にうつせないうちに年をとってしまったことの嘆きがうたわれている。

いま住むところから、なお深い山に入ろうと決心した背景には、現在の山居が俗世から完全に逃れきつた場でないという嘆きがあるのだろう。山深く入ることもせず、中途半端な気持で年月をおくつてきたことへの述懐である。

(神祇)

(30) 聞わたるあまの浮橋とをけれどいまも神代の道ぞ残れる(四九六)

(校異) なし

「あまの浮橋」とは「古今集仮名序」の「このうた、あめつちの、ひらけはじまりける時より、いできにけり」の割注にある「あまのうきはしのしたにて、めがみながみとなりたまへることをいへるうたなり」を受けてゐる。また「浮橋」があるので「聞わたる」の「わたる」は縁語である。

天の浮橋のことは、遠い昔のことと聞いてきているが、今でもなお神代の歌の道は、すたれずに残つてゐることだといふ意。

和歌の道が神代から絶えることなく、今の代までよみつがれてきたことを神に感謝して、祝意を表明してゐる。

(昭和56年10月7日受理)

てねたれば。おもふ人に逢て。契をかはしつるゆへ。夢のさめても。誠に逢たると思はれて。身にうつり香の残りて有かと思ふに、移香の残らぬまゝ。さてハ誠に逢しにはあらず。夢也としられて悲しき也。」と解する。が、「玉箒」は「衣をかへしてぬれば、必戀しき人にあふならひ也といへるは誤也。あふにはあらず。夢にみるならひ也」と批判し、「一首の心は。實に逢事はかなはずとも。せめて夢になり共見んと思ひて。衣を返してねたれば。夢にあふと見たれども。實の契にあらざる故に、さめてうつり香の残らぬがうきとよめる也。」と解するのであるが、夢の中に恋人と契つたが、それは現実ではないので、目覚めて移り香の残っていないのを悲しむ点では、さして両意見はかけはなれているとも思われぬ。

夢に恋人に逢おうとし、また、夢の中の契りから衣に移り香の存在を確かめようとするところに、切ない恋情が窺える。

九月十三夜將軍家三首、庭松

(25) 軒ちかき松のひびきに四方の海の風しづかなる程ぞしらる、(四〇三)

(校異) なし

「軒ちかき松のひびき」は、この歌では瀟々とした静かな響きであると思う。その静かさが「四方の海の風しづかなる」と関連してくる。「四方の海」とは四海のことであり、四海とは天下を指している。

従つてこの一首は、軒の近くに植えてある松の静かな響きによつても、天下が無事、静かに治まっていることが知られることだとなろう。詞書によると、將軍家での詠歌なので、よく統治された天下を祝して挨拶としたもの。

なお、「四方の海の風しづかなる」の措辞は、次の歌にみえる。四方の海風静なる浪の上にくもりなきよの月をみるかな

(後京極攝政前太政大臣・統後撰・賀・一三五八)

小蔵宰相中將尋られしとき、山家

(26) 都人かへらばなをや山里はとはれぬよりもさびしからまし(四一六)

(校異) なし

詞書からすると、都人は具体的には小蔵宰相中將を直接指していることになる。山里は常日頃から寂しいところとして設定されている。

「都人かへらば……まし」となっているのは、都人はこの歌をよむ時点では、まだ帰つてはいないわけで、想念の世界で思つたことになり、都人がこのまま帰つてしまふと、この山里は訪問されないうきよりも、もつと寂しくなろうという意で、その背後に、「今しばし、とどまり給へ」という希求がある。

いつも寂しい山里だが、偶々、気心の知れた友人が尋ねて来て、しばらく歓談して心慰むときをもつが、その友が帰つたあとの寂しさは、一人でいたときよりも、もつと寂しく感じる——孤独に関する人間の心理作用として充分に理解できるところである。「兼好自撰家集」に山ざとははれぬよりもとふ人のかへりてのちぞさびしかりける(二三二)と全く同じ心理を詠じたものがあるのは、興味深い。

月前旅

(27) 草枕むすべば露にやどるなり山路をおくる夜半の月影(四二五)

(校異) なし

「山路をおくる」月影とは、今まで山路を通つて旅を続けてきた自分を送つてきた月、即ち、旅人と同じように移動してきたことを示す。「むすぶ」は「草枕」とともに露の縁語になっている。

一首は、旅寝すると今まで山路を遠く送つてきた夜半の月影も、同じように枕の露にやどることだの意。

この歌には、自分といつしよに旅を続けて山路を送つてきてくれた月だが、自分が旅寝すると同じ様に、露にやどるというところに発

また、杜の木の間に「月ぞふけゆく」のは、木々の葉を風が吹き散らすので、月光がいよいよ木の間に洩れてくることになる。「ふけゆく」にはこの場合、寒さの感触も含まれているとみてよい。

従って一首は、霜のおいている上に、さらに落葉を散らす風がさえずえと吹き、杜の木の間からは、月が更けて寒い光をなげかけているという景になる。霜、落葉、それに寒風という荒寥とした風景を、寒々とした月光が照らしているのである。

(聞蔽)

(22)散のこるならのかれはに音たて、枝にひとむらふるあられ哉(三〇五)

(校異)なし

この歌の「枝にひとむら」をめぐって、「諺解」と「玉箒」は意見を異にしている。「諺解」は「葉の一村残りたる枝にふるゆへ。それにそへて。あられの一村といへり」と解するのに対し、「玉箒」は「楢の葉の枝の。一むら枯残りである所ばかり蔽の音して。他の枝には葉のなければふる音のせぬ故に。よそにはふらずして其枝ばかりに。蔽もたゞ一むらふるやう也との意也。蔽は所を分て別に一むらふる物にはあらぬを。一むらふるとよめるが趣意也」とする。おそらくは「玉箒」の理解が作者の意図を言いあてているだろう。

「枝に一村」という表現は、

ちりのこりたるもみぢを見侍て

唐錦枝にひとむらのこれは秋のかたみをたぬなりけり

(僧正遍昭・拾遺・冬・二二〇)

にみえる。

一首は、楢の木の散り残っている枯葉にバラバラと音をたてて、ひとむらの蔽が降ってくることだの意となる。

枯葉に蔽の降る荒寥たる景を詠じたというよりも、「玉箒」の指摘

するように、枝に枯葉が一村残っている所に降るので「ひとむらふる」蔽といったところに、趣向があるのだろう。

爐火

(23)さゆる夜にあたりの霜はつれなくてきえがたになるねやの埋火(三二七)

(校異)夜に一夜の(架本)、霜雪(松平本)

「霜」をめぐって、ここでも「諺解」と「玉箒」は対立する。「諺解」が「あたりの霜とは。白灰也」とし、「寒夜なれハ。炉中の火のまはりの霜ハつれなく消ずして。炉火ハ消がたに成たる也」と解するのに対し、「玉箒」は「あたりは闇のあたりにて。霜は實の霜をいふ也」とする。「玉箒」の理解が妥当であろう。

「霜はつれなくて」とは、霜がいつこうに消えないことを意味する。一首は、寒々とさえる夜に、あたりの霜はいつこうに消えなくて、闇においてある埋火が消えかかっている景となる。つれなく消えないものと、はかなく消えてゆくものを対比的にとらえているところに趣向がある。

さえずえとした夜の、埋火のぬくもりもなくなった闇の寒さに、この歌中の人物の心もつめたくなつてゆく余情が窺える。

寄衣恋

(24)うつり香の残りぬぞうきさよ衣かへしてみつる夢の契に(三七三)

(校異)ぞうきもうし(承応本)、契に契は(松平本)

この歌でも「諺解」と「玉箒」では微妙に理解がずれている。「諺解」は本歌として、

いとせめてこひしき時はむばたまの夜の衣をかへしてぞきる

(小野小町・古今・恋二・五五四)

をあげ、「衣をかへしぬれば。必恋しき人に逢習也。今我も衣を返し

同一歌とみななければならない。あるいは別々の歌会に提出した歌かもしれない。

霧は自然に浮んで上昇するものであるが、この歌の場合、河風に吹き敷かれて河面に沈んでいるので、その中を下る宇治の柴舟が、まるで霧に浮いて流れ行くようにみえる景である。川面にたちこめた霧の中を行く舟を「うきてぞくだる」とみたとところに作者の手柄があるといえる。

この歌から、寂蓮の

暮れて行く春の湊はしらね共霞におつるうちの柴舟

(新古今・春下・一六九)

の著名な歌を想起する。

風に吹き敷かれた白く柔らかい霧の中を、まるで霧に浮いたように下り行く柴舟の景は、朦朧として幻想的ですからある。

寒草

(19) 猶さえて吹まされども冬草のかれはよはる風の音かな(二七五)

(校異) なし

「猶さえて吹まさ」るものは、もちろん風であるが、それが「かれはよはる」とみているところに工夫がある。風が吹きはじめたころは、まだ草葉も茂っていたので、吹くにつけて葉が激しく音をたてたが、今は葉も枯れてしまったので、風自体は強く吹いても、いっこうに激しく吹いている音がしないというのである。

冬になると風はいよいよ寒く吹きまざるけれども、冬草の葉が枯れて、風のやどるところもないので、風の音はむしろ弱って聞こえるという意である。

伝統的な発想としては、冬になると寒風が激しく吹くとするのであるが、この歌では枯葉なので、吹き弱るとみたところに、新味がある。

この新しさは实景に即したものであるというよりも、想念の世界でおもいついたものであろう。

朝霜

(20) 冬草のあしたのはらの霜の上によるふす鹿の跡ぞのこれる(二七九)

(校異) 冬草―冬がれ(承応本・松平本・架本)

底本の本文は初句を「冬草」とするが、諸本のように「冬がれ」の方がよいであろう。草が枯れないうちは、草が押し敷かれたことで、鹿の寝た跡がわかるが、枯れてはわからなくなるのが一般である。そこをこの歌では、霜がおいていけば消えた跡で確認できるという発想をとっている。

従って、一首の景は、冬枯れた草の上においた霜に、夜臥した鹿の跡がくつきりと残っているということになる。

この歌では、寒夜を霜の上で臥した鹿への哀れみの心情まではこめていないと思うが、霜の消えている跡に着目したところに、新しい趣向があり、微細な観察が窺える。

冬月

(21) 霜の上に落葉ふきまく風さえて荻あやの木のまに月ぞふけゆく(二八〇)

(校異) 荻―杜(承応本・松平本・架本)

底本は「荻の木のまに」で不審なので「松敷」と傍記しているが、ここは諸本のように「杜の木の間」とみるのがよい。

「落葉ふきまく風」とは、風が落葉をことさらに散らしたように吹いているさまで、

おのづから音する物は庭の面に木の葉吹きまく谷の夕かぜ

の用例もある。
(清輔・新古今・冬・五五八)

(校異)なし

この歌は「諺解」が「曇りたるほどは。露も分明に見えず。雲晴てハ、月の明らかにかうつるゆへ。露もよく見ゆるを。のこりてと読り。風も心有て。月のために。雲をば払ひたれども、月のやどる露をばのこしたるといふ心も有べし」と解するのに対し、「玉箒」は、「歌の心は。すべて雲も露もともに風の吹はらふ物なるに。今は月のさきりとなる雲ばかりを払ひて。露はのこりたるに。晴たる月のやどれる也」と「諺解」を批判する。「玉箒」の理解が妥当であろう。

今まで空をおおっていた雲を秋風が吹き払ったので、ここ武蔵野に残っている露に月影が光をやどしていることとどう意となろう。広大な武蔵野、そこに無数に置いた露に月光がきらめく、美しい景が想像されてくる。

湖上月

(16)にほの海や浦が吹ばすむ月のこほりをこゆる水の白浪(二二二)

(校異)なし

「月のこほり」としているので、水面にやどる月光を氷に比喻している。また「こほりをこゆる水の白浪」は、海面を氷にみたてているので、白い浪のたつのを、このようにとらえたものである。

一首は、琵琶湖に浦風が吹おこつてくると、海面に映つた月の氷を越えて、白浪がたつ景である。「氷をこゆる」という措辞は、

日かげさす水上よりやとけぬらむ氷をこゆる春の川なみ

(読人しらす・玉葉集・雑一・一八二二)

にみえ、共に浪が氷の上を越える点で一致するが、「玉葉集」の歌の氷は実際にはつた氷である。

白々とした月光に照らされて、湖はすきまもなく氷りついたように見えている。そこに浦風が吹くと白い浪が立つて氷を越えてゆくよう

に見える。月光を通してみた湖の夜の白く冴えた景を思いみるべきであらう。

月前嶋

(17)月やどる沢田の面にふす嶋のこほりよりたつ明がたの空(二四〇)

(校異)なし

まず、沢田の面に白い月光がやどっているのを氷に比喻している。従つて、この一首は、沢田の面に月光が映つて、まるで氷がはつたようになつて行っているが、そこに臥していた嶋が明けがたの空へ、氷の中から飛びたつて行つた景となる。

因みに頼阿は、この歌によつて「沢田の頼阿」と呼ばれたというから(三光院作と伝えられる「和歌難波津」にみえる)、後世の人はこの歌を頼阿の代表作の一つとしていたのであろう。確かにこの歌には、発想といふ表現といい、優れたものをそなえている。

嶋は沢田のあたりに一夜臥しあかしたのであろう、明けがたの空に向つて飛び立つさまを、比喻を越えて「こほりよりたつ」と直接表現したところが巧みである。

ここには、明けがたの清澄な空気を振わせて、白く飛び立つ嶋とともに、さえざえとした感覚が全体をつつんでいる。

河上霧

(18)河風の波に吹しく朝霧にうきてぞくだる宇治の柴舟(二四二)

(校異)柴舟―柴橋(松平本)

この歌とほぼ一致する歌が「草庵集」にみえる。

河霧

河かぜの波にふきしく秋霧にうきてぞくだる宇治の柴舟(一一六九)
歌題(河上霧―河霧)と「朝霧」と「秋霧」のわずかの相違があるが、

(12)ねざめにぞ昔はき、し夜もすがら吹ける軒の萩の上かぜ(一八三)

(校異)にぞにて(架本)、昔は昔(松平本)

「老のねざめ」ということがある。軒の萩の上を吹く風の音を、昔は暁方の寝覚めに聞いたが、今では宵から暁方まで一晩中聞いているという意である。

「諺解」は「かのねざめばかりに聞しむかしがゆかしき也」とくみとつているが、いかがであろうか。むしろこの歌では昔のゆかしさより、ただ今のやりきれない孤独や淋しさを強調しているのではなからうか。

伝統として萩の音は淋しさの気分をかきたてるものとしてある。その音を、まんじりともせずに一晩中聞きあかすというのであるから、身につまされる淋しさが思われるのである。

それに加えてこの歌には「老」のことも問題になっていよう。暁の寢覚に聞いたのは初老の頃であり、今は一晩中眠れないほどの老齢になったという嘆きが背後にあるとみたい。

薄

(13)もずのなくお花がす糸の夕日影のこるもさびし秋の山もと(一九三)

(校異)山もとー山里(承応本・松平本・架本)

「諺解」は本歌として

秋の野の尾花が末に鳴く百舌鳥の聲聞くらむか片聞く吾妹

(万葉集・卷十・二一六七)

をあげるが、百舌鳥が尾花の末に鳴く所は一致するものの本歌ではなからう。

また「夕日影のこるもさびし」の措辞は、
難波がた入江にさむき夕日影残るもさびし蘆のむら立

(権中納言通相・風雅集・冬・七八一)

と一致し、京極歌風にも通うところがある。

一首は、山里の秋の夕暮時に、夕日影のかすかに残っている尾花の末に鶉が鳴いている景は、どことなく寂しきの気分をそそられるという意となる。

山里の秋の夕暮、かそけき夕日をうけた尾花、そこにせわしげになく鶉の声、すべて寂しさをかきたてるものばかりである。

山家初雁

(14)秋山の峯のいほりの夕霧に軒ばをわたる初雁の声(二〇四)

(校異)なし

「峯のいほり」とあるので、かなり高い所にある庵を設定している。また、この歌では、深く立ちこめた夕霧のために、雁は庵の有り所を知らないで、軒ば近くをつらなつてわたつてゆくことにもなり、庵の主人としては、雁の姿が霧で見えなく、ただ、声のみ聞くことにならう。

濃い霧で姿のみえない雁が軒をわたるのを、声に着目して「軒ばをわたる」ととらえた表現が新鮮である。「軒ばをわたる」という措辞は、『国歌大観』では次の一首だけ。

月のいる枕の山は明けそめて軒端をわたるあかつきの雲

(院御製・玉葉・雜二・二二一七)

一首は、秋山の峯の庵のあたりには、霧が濃くたちこめており、そこへ初雁の声が軒のあたりを渡つて行くのが聞こえてくる景である。

「初雁の声」と聴覚でとらえるものを「軒ばをわたる」と、いかにも視覚的に表現したところが特異である。

野月

(15)むさし野や雲をばはらふ秋風に露はのこりて月ぞやどれる(二二五)

によつてもわかる。(8)の歌には、今夜は鳴くか今夜は鳴くかと毎夜、郭公の声を待つていたことが前提としてある。

これまで鳴かなかつたが、月が雲間にあつて村雨のそぼふる空模様
の今夜という今夜は、よもや郭公も鳴くのを忍ぶことはできないだろ
う(きつと鳴くだろう)の意となる。

なお「諺解」は「村雨のはれたるあとの雲まに。月の残りたるは面
白景色なれば」と解しているが、ここはまだ村雨もそぼふつていと
みたい。

夕螢

(9) ゆふぐれはをのれももえてかやり火のけぶりの下にとぶほたる哉(一六三)

(校異) とぶ―散(架本)

「をのれももえて」とは蚊遣火の燃えているのに対して。夕暮
ともなると蚊遣火の燃える煙の下に、自身も燃えながら螢が飛んでい
る景である。「けぶりの下」としたのは、蚊遣火の上は、明るいの
で螢の点滅がよくわからないからであろう。蚊遣火の火と螢火の点滅を
対比的に描いて、両者が張り合っている感じさえ想像される。

また、周囲は闇夜、その中に蚊遣火の煙と螢の点滅、沈黙の深いな
かで、音もなく点滅する火をとらえて幻想的ですからある。

秋声帯雨荷

(10) 風のはちすは露おちて秋にすゞしき雨の音哉(一六六)

(校異) 〈題〉雨荷―露(承応本)

この歌題は「白氏文集」(卷十七)の「浪色投煙鳥、秋聲帯雨荷」
に依拠している。

「秋にすゞしき」とは、今は夏でありながら秋のごとく涼しいこと。
従つて一首は、池の蓮葉に風が吹きわたると露がこぼれ落ち、葉に

注ぐ雨の音は、まるで秋のような涼しい音であるという景となる。

単に「風吹けば」とせず「風わたる」としていることで、池の水面
を広く吹きわたると同時に、蓮の葉にやどつていた露が、つぎつぎ吹
き落とされてゆく景がとらえられている。「秋にすゞしき」とは、単
に蓮の葉をうつ雨の音だけでなく、それ以前の蓮から露のこぼれ落ち
るさまが、同時に作用しているものと思える。全体に納涼の気分があ
り、水滴からくる清涼しい感じを受ける歌である。

夕立風

(11) 風はやみふるかとみればあま雲のよそになり行夕立の空(一六七)

(校異) ふる―縫(架本)

「諺解」に指摘のごとく、この歌は次の「伊勢物語」(十九段)の
贈答歌から詞を取つてきているとみてよい。

天雲のよそにも人のなりゆくかさすがに目には見ゆる物から

とよめりければ、おとこ、返し

天雲のよそにのみしてふることはわがる山の風はやみ也

また、「諺解」は「あま雲とは雨雲に非。天雲也。天の雲也」とす
るが、いかがであろう。夕立を降らせているのだから、雨雲とも考え
られる。

風が早いので、夕立がひとしきり降つたかと思うと、雨雲は吹かれ
て、よその方に移つていった空であることよの意になる。

夕立というものは、本来、一つ所に長く降り続くものではなく、あ
わただしく降り去つてゆくものだが、この歌では、それに加えて風が
早く吹いているので、一段とあわただしい雲の動きが描かれているこ
とになる。

夜萩

この歌では、まづ「をくれてあくる」とみた原因をさぐる心が肝心である。初瀬山の鐘がつきだされるのは、普通は夜がしらまぬさきである。それが、この歌では桜の花のため、いつもより早くしらんでいるので、鐘は普通と同じ時刻にならしても、遅れてなつたように錯覚した。その点を「をくれてあくる」とみたのであろう。

初瀬山の尾上に咲く満開の桜の花と、そこからうちだされる鐘の音を詠ずるに對し、それを單なる叙景として描写せず、「をくれてあくる」という、知的な発想をもつてうたったところに新味をだそうとしたのであろう。

桜のために山が「しらむ」用例歌として、「諺解」は、
ほのくくと花の横雲明けそめて桜にしらむみよしの、山

(西園寺入道前太政大臣・玉葉・春下・一九三)
を引用している。

花如雪

(6) 吹はらふ風にぞきゆる日影さす庭につれなき花のしら雪(八七)

(校異) なし

雪がなかなか消えないさまを、「つれなき」と形容した歌には、
かすが野の下もえわたる草の上につれなくみゆる春のあはゆき

(権中納言国信・新古今・春上・一〇)
あさ日かけにほへる山の桜花つれなくきえぬ雪かとぞみる

(藤原有家・新古今・春上・九八)

などがあるが、特に後者は桜の花を雪にみたてており、(6)の歌と発想が近似している。

花の雪なので庭に日影がさしても、いつこうに消えなかつたけれども、風が吹き散らすので、やがて雪も消えるとみたのである。

先の有家の歌は、花の雪は朝日がさしても、つれなく消えないとう

たっているが、頓阿の歌はさらにそれを展開させて、風が吹けば花の雪も消えるとみたところに新味があるといえる。

水郷落花

(7) 立浪のしらゆふ花もひとつにて桜ちりかふ志賀のうら風(九三)

(校異) ひとつ—ひとり(松平本)

波や水飛沫を「しらゆふ花」に比喩したのは、「万葉集」に、
山高み白木綿花に落ち激つ瀧の河内は見れど飽かぬかも

(笠金村・卷六・九〇九)

ほか数首みえる。

「ひとつにて」とは、立つ波の「しらゆふ花」と風に散らされる桜の花が、ひとつになつて散り交うさまである。

従つて一首は、志賀の浦を吹く風のために、浪のしらゆふ花と桜の花びらがひとつに交わつて散り乱れている景となる。

「諺解」は「浪の白ゆふ花も桜花も、ひとつに。浦風にちりかふをしむや」と解しているが、いかがであろうか。ここは、浪の白い飛沫と白い花びらが乱れ散るさまを、一つの美としてうたいあげているのではなからうか。

郭公

(8) こよひも忍びははてじ時鳥月は雲まのむら雨のそら(一二二)

(校異) なし

「忍びははてじ」とは、時鳥が鳴くの忍びまることができない意。それは、月が雲間にあつて村雨の降っている空だからである。村雨の空のもとで郭公がよく鳴くことは、

いかにせんこぬ夜あまたの郭公またじと思へば村雨の空

(家隆・新古今・夏・二一四)

歌としては、

花のかを風のたよりにたぐへてぞ駕さそふしるべにはやる

(紀友則・古今・春上・一三)

が考えられる。本歌は梅花を風という使者につれそわせて、鶯を谷から誘い出そうとするのに対し、(2)の歌は、すでに月光の美しさに浮かれ出ているのに、その上、梅花が自分を誘いだすと転化している。

従って一首の意は、梅の下風が吹かなくても、春の月光にあこがれ出た夜であるのに、その上に梅花をおくる風まで吹いて、いよいよ誘いだされて、あこがれ歩くことだとなる。

朧な春の月光と馥郁とかおる梅香のある春の宵の艶麗な世界を詠じている。

夕春雨

(3)とぶ鳥のつばさしほれて帰らずはくる、もしらじ春雨のそら(二五)

(校異)〈題〉夕春雨—春夕雨(松平本)

一日中、春雨が煙るように降っているので、空は日暮れのように暗く霞んでいるのであろう。また、この「とぶ鳥」は、特に雁に限定せず、埤に帰る鳥とみてよい。

以上を前提とすると、一首の意は、飛ぶ鳥が春雨に翔をしておらせて埤へ帰るのを見なかつたなら、春雨が朝から降り続き、一日中薄暗くなっていたので、日の暮れたのもさだかでない空であることだとなる。

「つばさしをれて」の表現は、

春雨につばさしをれて行く鷹の雲にあとなき夕暮のそら

(入道親王尊快・続拾遺・春上・五四)

にみえ、「くる、もしらぬ」は、頓阿自身、

家路こそわすれもはてめ山ざとのくる、もしらぬ花の陰哉

(草庵集・一五五)

と詠じている。

一日中、薄曇った春雨の空を眺めながら、時刻のうつろいも感じなかつたが、二羽三羽と埤に帰る鳥を見て、もう夕暮になったのかと驚いているさまである。

暗く降り続く春雨の空を印象付けるため、埤に帰る鳥を点描して、日暮れを知ったとしたところに知的な新しみがある。

池辺花

(4)さく花のかげみる庭の池水はにほひもうつるか、みなりけり(六三)

(校異)なし

水面を鏡に比喻した歌には

年をへて花のかみとみる水はちりかゝるをやくもるといふらむ

(伊勢・古今・春上・四四)

があるが、頓阿もこの歌を念頭に置いていただろう。「にほひもうつる」は「映る」と「移る」をかけている。

一首は、咲いている桜の花の姿を映している池の水は、匂いまでも移る鏡となつてのことだの意。

「諺解」は「常の鏡にも。花の影ハうつれども。匂ハうつらぬに。

此花の影のうつりて見ゆる池水の鏡には。花の匂もうつりて。水もかうバしきなれば真の鏡にハまさるとよめり」と解しているが、真の鏡よりまさるといふ意までこめていかどうかは疑問である。水の面を鏡と見立てる発想は伝統的であつたが、そこに姿だけでなく、「匂ひ」までも移るとみた点に新味がある。

花下鐘

(5)はつせ山さくらにしらむ尾上よりをくれてあくる鐘のをと哉(六八)

(校異)なし

